

# Distortional LoveLive!

アカトーム

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

たとえ一瞬の輝きだとしても、それさえあればいい  
それはきつと、彼女たちも……

偶然の出会いから始まった、たった1年の少年少女たちの軌跡

# 目次

1st	Phrase: Before	
The	Dawn	1
Ex	Phrase: 星に願いを	
12		
Ex	Phrase: When You	
Wish	Upon The	
Star		
29		
2nd	Phrase: Wake	
52	For	
Young	Souls	



## 1st Phrase: Before The Dawn

雪が降っている。もう3月になったとはいえ、この地方では珍しいことではない。名残り雪、とも言えるだろう。ぼんやりとプラットホームで新幹線を待ちながらそう考えた。

「名残り雪、だな」

今まさに自分が考えていたのと同じことを隣に立つ陽介が呟く。それはきつと、俺に、そしてなにより彼自身に言い聞かせているのだろう。ああ、とだけ返す。それ以上何も言えなかった。言ってしまったえば、いつの間にか足元に降り積もった見えない雪に足を取られてしまいそうだったから。

彼もそれから口を開かない。新幹線が来るまであと7分ほど。このまま何も言わずに立ち去るのがきつとお互いにとつてベストな選択だろう。でも、時として人はそれを知っていないながら、別な道を選んでしまう。最善の道を捨て、遠回りや険しい道を選択する。すべての人がそうではないだろうけど、少なくとも俺たちはそうやって、いつも最善の道に唾を吐いて進んできた。だから、きつと今も何も言わないなんてことはできな

い。

「本当に行つちまうんだな」

「……今更、やつぱりやめます、なんて言えるわけないだろ。それに言う気もねーよ」  
「でも、バンドはどうするんだよ？ お前が作ったバンドじゃないか……」

やはりこの話に行きついてしまう。陽介と、そしてアイツらと組んだバンド。けど、それはもう過去の話だ。そんなでかい荷物は持つていけない。ここに置いていく、そう決めた。

ポケットから煙草を取り出す。口にくわえて、火を灯す。最初は肺まで煙を入れず、口の中でふかすだけ。そう教わった。

「悪い。こんな解散みたいな感じにしちまって」

「それをアイツらにも言つてやれ。アイツらはその一言が欲しいだけなんだから」  
「分かつてる」

今度は肺まで煙を入れる。そして大きく息を吐いた。息が白い。寒さのせいか、それとも煙草の煙なのかまでは見分けがつかなかった。

「分かつてはいるけど、言えないんだ」

言わなければいけない。でも、それを口に出したくはなかった。何故だろうか？ 自分でもよくわからない。何かが引つ掛かつて、邪魔をして、言えなくなってしまう。その

理由がわからない。

「そういやお前、荷物はそれだけで大丈夫なのかよ?」

唐突に話題を変える陽介。彼なりの気遣いというやつだろう。相変わらず口下手で、脈絡のない話をいきなり持ち出してくる。

「ん? ……ああ。俺にはギターとタバコがあれば十分さ」

「お前、未成年だろうが」

「細かいことは気にするなよ。今日くらいだ、外で吸うのなんて」

大分灰がたまってきていたので、軽く揺らしてそれを落とす。風に乗って舞うその様は、すぐに雪と紛れて区別がつかない。

「それで、荷物のことだっけ? 心配せずとも、もう全部送つてある」

「相変わらず、変なところで頭が回るやつだ」

「うるせ」

短くなった煙草をもみ消していると、新幹線がホームに滑り込んできた。入口が開く。数人が降りて行った後で、俺が乗り込む。すぐに立ち止まり、振り向いた。陽介はいつも通りのポーカー・フェイスだが、心なしかどこか悲しそうな表情に見えた。

「本当に行くんだな」

「何回目だよ、その台詞。もうとつくの昔に決めたんだ。それに、アッチに行けばあの人

が見つかるかもしれない」

「お前、まだ……」

出発のアナウンスが流れる。もう数秒もせずにドアも閉じるだろう。

「じゃあな」

そう告げるのと、ドアが閉まるのは同時だった。ゆっくりと加速していく新幹線。陽介はただこちらをホームで見つめていただけだった。遠ざかっていくその姿。その視線を完全に振り切ってしまった後も、しばらくそのまま佇んでいた。今生の別れでもあるまい。声には出さず呟いて、自分を納得させる。適当に空いている席を選んで座った。窓の外を眺めると、もう雪はやんでいて雲の切れ間からは太陽が差し込んでいた。本当に名残り雪だったのかもしれない。俺が降らせたのかそれともアイツらか……。きつと俺の方だろう。いつだって俺からアイツらへの一方通行だった。今回のことだって、俺が一方的に言い切ってしまったことだから。ふと、時計を見る。降りる駅まではあと1時間くらいあった。少し眠ることにしよう。せめて、夢の中では……

それから、二回くらい電車を乗り換えて目的の駅に着いた。あとはここからこれから住むことになるマンションに行くだけだが、ここで問題が起きた。携帯の充電が切れてしまったのだ。一応、住所を書いてある紙は持っているが、それだけで行けるとは到底思えなかった。駅員に聞くという手もあるが、何となくそれはやめ、適当に歩くことに



した。最悪、近くのコンビニか交番に行けばいいだろう。そうして何十分か歩いていると、鳥居が目に入ってきた。折角なので、お参りでもしていこうか。そのついでに道を尋ねればいいだろう。そんなことをぼんやりと考えながら、石段を上っていく。どうやらこの神社は神田明神、という名前らしい。段数の多い石段を上りきると、思いの外立派な本殿が現れた。とりあえず、お参りをすることにした。財布を取り出そう、と思っただが、ポケットに入っていたのはタバコとライター、反対側には携帯しか入っていなかった。そういえば、送る用の荷物にまとめて入れてしまったかもしれない。仕方ない。背負っているギターケースからピックを一つ取り出し、それを賽銭箱に放り投げた。

「ここから、いたずらはあかんよ」

そこを去ろうとすると、後ろから声を掛けられた。振り向くと、そこにいたのは巫女さんだった。年齢はそう変わらないようなので、家の手伝いかバイトだろう。

「すいません。財布を持っていなくて、代わりになるかなーと思って」

「そういうことやったら、今回は大目に見てあげるわ」

「助かります。あと、ちよつと道を尋ねたいんですけど。ここの住所ってどう行けばいいんですか？」

「ええよ。……あれ、このマンション多分うちと同じところや。しかも隣の部屋」

え、と思わず驚きの声を上げていた。まさかそんな天文学的な偶然があるとは思って  
いなかった。それなら、と巫女さんは住所を書いた紙を俺に返しながら言った。

「あとこの辺の掃除が終わったら、今日のバイトは終わりやからちよつと待ってても  
らつてもええ？」

「大丈夫ですよ。じゃあ、その辺りで待っていますね」

ちよつど座れそうところがあつたので、そこに腰かけていることにした。手持無沙  
汰だったので、ケースからギターを取り出す。挟めていたピックを取って、弦に滑らせ  
る。チューニングは大丈夫そうだ。

そのまま適当にコードや、運指の練習を兼ねて色々なリフを弾く。ザツザツと竹ぼう  
きが石畳を掃く音とギターの音、時折風が木を揺らす音だけが響く。今日は3人編成。  
掃く音がベース代わりにリズムを取って、ギターと風がメロディー。次第に弾くりフは  
ジャズ・ファンクよりのものに。足でリズムを取りながら、日本語と英語の入り混じっ  
た羅列を、即興のメロディーで歌う。意味なんて分からない、リズムだつてめちゃく  
ちやだ。でも、今だけの、この一瞬だけの感情を出す。段々熱量が大きくなっていくの  
が分かる。軽快な音から重い音へ。次第にパワーコードを多用していく。自分が好き  
なジャンル、そして何よりバンドでいつもやってきたジャンル。歌声も、ギターの音も  
大きくなっていく。もつと深く、もつとエモーショナルに。置いていくと決めた過去を

全部振り切るんだ。ここからは別の道なんだ。激しいカッティングを織り交ぜていく。勢いを衰えさせることなく掻き鳴らしていく。そして、ラストの音を鳴らし、自然に音が小さくなっていくのを待つ。すると、パチパチと手を叩く音が聞こえてきた。顔を上げると、先程の巫女さんが既に巫女服から学校の制服に着替えて立っていた。

「すいません、お聞き苦しい演奏でした。行きましようか」

「いやいや、めっちゃ上手かったで！ 感動してもらった」

「……ありがとうございます」

これまでこんな風にストレートに褒められたことはなかったため、少し照れてしまう。ギターをケースにしまい、再び背負う。俺の準備を整ったことを確認して、巫女さんが歩き出す。

「待たせてしもうて申し訳ないなあ」

「いえ、此方こそ助かりました。えっと……」

「希や。東條希、よろしくな」

「松波巧実マツナミタクミです。よろしくお願います、東條さん」

「巧実くんはどうして引越してきたん？ 親の都合？」

「まあ、簡単に言ってしまうえば俺の我儘です。東北の出身なんですけど、どうしても地元の高校には進学したくなくて」

「ふーん、この辺に住むとなると明狼あたり?」

「ええ、その通りです。もしかして東條さんは明狼の方ですか?」

「ううん、うちは音ノ木坂学院。これでも生徒会副会長なんやで」

「へえ、巫女さんのバイトもこなしながらって凄いですね」

その後も色々話をしながらマンションへと向かっていった。東條さんが通っている音ノ木坂学院というのは女子高らしいが、近年の少子化や最近秋葉原にできたUTX学園というところに生徒を取られているらしく、廃校に進みつつあるということだ。生徒会でも副会長の東條さんと会長のえりちさん?という方とでどうにか廃校を阻止できないかと色々と案を考えているらしい。

「それは大変ですね」

「うちはそんなんでもないんやけど、えりちがなあ……。最近ちよつと張りつめ気味なんよ」

「まあ、あまりに根を詰めすぎてはいい考えも出てきませんから、ちよつとはリラックスというか気を緩めてほしいですね」

「そうなんよー。全くえりちは……つてごめん。いきなり愚痴ばかり言うて」

「気にしないでください。東條さんも板挟みみたいな状況で大変そうですし」

「ほんまおおきに。ところで巧実くんはバンドとか組んでないん? さつきもめつちや

上手やったし」

「…今は組んでいません。一先ずはこの辺りの楽器屋とかライブハウスに行つてギターを募集しているところを探そうと思います」

そう、俺はもうあのバンドのギターじゃないんだ。伝手も何も無い、ただの流れ者のギター弾き。色々なバンドを渡り歩いて、もつと上手くなって、新たに自分のバンドを作る。そう決めたんだ。

それからいくつか言葉を交わしながら歩いていると、マンションに到着した。階段を上つて部屋の前までたどり着く。

「今日はありがとうございしました。おかげで助かりました」

「ええよ、困ったときはお互い様。あ、そういえば夜ご飯はどうするん？」

「適当にコンビニとかで買つてすませよう、か、と……」

しまった。今は財布がなくて無一文の状態だった。荷物が届くのは明日、だから最低でも明日の昼くらいまでは何も食べられない。不思議そうな表情を浮かべていた東條さんだったが、直ぐその理由に気付キクスクスと笑いだした。

「しゃーないなあ。引越し祝いでご飯おごつたげるわ」

「そんな、大丈夫です。一食くらい食べなくても」

「だーめーや。いいからここは、先輩の言うことを聞いとぎや？」

「……ご馳走になります」

それから、机も何もない俺の部屋で宅配ピザやジュースなんかを一緒に食べた。一人暮らしにはかなりの出費だろう。本当に申し訳なかった。一通り全部食べ終わつた後で、隣ではあるけれど、東條さんを見送ることにした。

「本当に今日は何かから何までありがとうございます。この借りは必ず返します」

「気にしないでいいんよ。うちが勝手にやったことやから」

「とにかく今日はありがとうございます、東條さん」

軽く頭を下げる。すると、東條さんはうーんと顎に手を当てて考え込むようなそぶりを見せた。そして、何か思いついたらしく口を開いた。

「じゃあ、その東條さんて言うのやめてもらえへん？ 希つて呼んで」

「分かりました、希さん。では、また」

「あともう一つ！」

「なんですか？」

「タバコはほどほどにな。未成年やる？」

「……善処します」

それを聞いた希さんは満足そうに笑顔を浮かべ、自室へと消えていった。内心ではとても驚いていた。まさかバレていたとは。なんとなく不思議な人だ。掴みどころがな

い、つていう表現がびつたりの人だった。

思えば、これがすべての始まりだったのだろう。希さんと、そしてあの8人の少女たちとの。1年という短い期間を、有り体に言えば青春ってヤツを必死になつて走り抜いた。

その始まり。

## Ex Phrase : 星に願いを

ちりんちりん

何処からか鈴の音が聞こえる。初めて聞く音。でも、どこかで聞いたことがあるような……。音がした方向を向くとそこに誰かが立っている。顔はよく見えない。背は俺より少し小さいようだ。

「え？」

その誰かが何かを呟く。しかし、距離が遠いのか、それとも声が小さかったのか俺のほうまで届いては来なかった。聞こえる距離に行こうかと、相手の方へ歩き出すが一向に進まない。それどころか、遠ざかってさえいるようだ。

「…たしには、……いから」

「アンタ、何が言いたいんだ？」

どうにか追いつこうと走っている状態で、叫ぶように尋ねた。

「私には、似合わないから」

「！ おまえ……」



多少は距離が縮まったのか、相手の顔が見えた。よく見知った顔だ。いつもにやーにやーうるさくて、でもいつも誰よりも元気なあいつの顔。でも、その顔はいつもと違つて暗く沈んでいる。何より、諦めの気持ちが強くて出ている。

声はつきりと聞こえた途端、一気に距離が遠ざかつていく。よくわからないが、とにかく放つておいてはいけない。それだけは強く感じた。でも、どうやって？相手はもう諦めかけている。それなのに？……考えるまでもないか。

「勝手に、諦めてんじゃねえ！」

そう言つて、俺はあいつの手をつかもうとして……

突如背中に衝撃が走つた。目を開くとここ数か月で見知つた天井。横にはベッド。

「なんだ、夢か」

声に出して確認する。今日は休日で珍しくどのバンドの練習も入っていない。出来るだけ寝ていようと思つていたのだが、起きてしまったのではしょうがない。床から体を起こし、多少の身支度をすることにした。今日は散策がてら秋葉原へ出かけることにしよう。久しぶりにエフェクターでも作ろうか。何を作るかは店に行つてから考えればいい。空は厚い雲に覆われていて、あまり天気はよくないけれど、楽器を持つていくわけではないから雨が降つてもどうにかなるだろう。

偶にはこんな日も悪くない。

♪ ♪ ♪

「こいつ、男女のクセにスカートはいてきてるぜ」

「ほんとだ！ やーいやーい」

そう言つて、私の前を走り去つていく男子たち。 やつぱり、私なんかが……

「やつぱり、似合わないよね。着替えてくるよ」

思わず駆け出していた。気づいたら自分の部屋の姿見の前に立っていた。そこに映つてるのはスカートをはいている私の姿。勇気を出してみたんだけど、やつぱり……そこで目が覚めた。目覚まし時計をとめて、起き上がる。今日は休日だけど、珍しく練習はお休み。だからかよちんを誘つて遊びに行こうと思つたんだけど、用事があつて駄目だつて言われちゃつた。何にもやることない。窓の外を見てもどんよりと曇つてる。しかも、午後からは雨も降つちやうかもつて。とりあえず、外に出てみようかな。何かないかな、おもしろいこと。

「今日は退屈だにや」

思わずそう呟いていた。

♪ ♪ ♪

秋葉原には幾度か来たことがあつたが、じっくりと見るのは今回が初めてかもしれない。いつだったか、小泉や矢澤さんに『スクールアイドルの勉強』と称してUTX学園

の屋外モニターの前やアイドルショップなんかに来たことはあったが、こうして色々見て回るのは初めてだ。電気街の名に恥じず、大通りの店はもちろんのこと、少し裏路地に入ったところにもいい部品を売っている店があつて、ついつい目移りしてしまう。衝動買ひしてしまいたくなる気持ちもあるが、あまり買ひすぎても今月が厳しくなってしまう。そんな欲望と理性との狭間で葛藤を続けていると、何時の間にか時間は12時を回ろうとしていた。一度、部品探しは切り上げて昼食にしようか。そう思つて、手に取つて品定めしていた電子部品を戻して店から出る。何を食べようかなーと周辺を見ながら、歩き出す。

空はその灰色を少し濃くしていた。

♪ ♪ ♪

何となく秋葉原に来てみたけど、退屈な気持ちは変わらない。誰かいないかなー、と思つてあつちこつちを見回すけれど、やつぱり誰もいない。歩き回つていたら、段々お腹もすいてきてそれが余計に凜を退屈にさせる。……何だか雨も降りそうだし、仕方ないから、ラーメン食べたらおうちに帰ろつかな。

「せめて、たつくんでもいてくれたらなあ」

思わず口にした言葉に自分でびっくりした。ちがうちがう！凜はただ退屈だけで、誰かいてくれたら楽しいのになつて思つただけで、そういうことじゃなくて。ぶんぶん

ぶんと頭を大きく横に振って忘れようとする。でも、考えないようにすればするほど余計に考えちゃう。ホントにちがうの……でも、なんでこんなに言い訳してるだろう？ ちよつぱりそんな不思議が心の中に生まれた。

——だから、今日の前に見えた光景が、凜は一瞬信じられなかったよ。

「たつくん!!」

♪ ♪ ♪

「たつくん!!」

聞いたことがある声で後ろから呼びかけられたので、振り返ると見知ったオレンジ色の髪の少女がこちらに駆け寄ってきた。

「なんでここにいるの?」

「そのセリフ、そのままそっくり返すぜ、ネコ娘」

「また凜のことそう呼ぶ! ネコ娘じゃないにや!」

「じゃあ、そつちも俺のことたつくんて呼ぶな」

「たつくんはたつくんだにや」

相変わらずの平行線で、いつも通りのやり取り。だけど、凜はどこかいつもより嬉しそうだ。

「あれ、小泉は?」

「かよちゃんは今日用事があるらしいにや。……もしかして、会えなくてさびしいのかな？」

「ちげーよ。大抵お前ら一緒だろうが」

いつもテンションが高い凧だが、今日は一段と威勢がいい気がした。遊び相手を見つけてかまってほしいとねだってくるネコみたいだ。じゃあな、と言つて元の方向に歩き出すと何故かその隣を凧がついてきた。

「なんでついてくんだよ」

「いいじゃん、いいじゃん。1人より2人の方が楽しいよ」

「エフエクターの部品探しに来てるだけだから、つまんないと思うぞ?」

「いいからいいから」

たぶん何を言つてもついてくるだろうから諦めることにした。と、そもそもこれから昼食を食べようとしていたことを思い出した。

「そーいやネコ娘、昼飯は?」

「ままだよ」

「じゃあ、とりあえずなんか食べるか」

「ラーメンがいいにゃ!」

予想通りの答えが隣から帰ってくる。別に文句はないのだが、思わず苦笑を返してい

た。変わらないな。まあ、それでこそその凜なのだろうが。

「お前、いっつもそれだな」

「だって、ラーメン美味しいじゃん！」

「別にいいけどな。でも、この辺あんま来たことないから店は任せる」

「任せて！ こっちに美味しいラーメン屋さんがあるから」

「おい、引つ張るなよ」

言うや否や、俺の手を取って駆け出した。女の子らしい柔らかい手に少しドキリとしたが、凜の方はもうラーメン屋さんに向かうことで頭がいつぱいで全然気にしていないようだ。やれやれ、と少し呆れながら俺も合わせて駆け出した。着いたラーメン屋は昼時だということもあり、混んでいたがさほど待つことなく席に着けた。俺は味噌、凜は醤油ラーメンを頼んだ。

「お、上手いな」

「でしよー！ 凜もしよっちゆう食べに来るんだ」

凜とはよく練習の終わりなんかにはラーメンを食べに行くことはあったが、そういう時は大抵小泉や真希なんかと一緒に、2人で食へに行くのは今回が初めてかもしれない。俺の目の前で美味しそうに食べ進めていく姿を見ると、何となく癒される、気がした。

「隙ありだにゃ」

「あつ、ネコ娘そのチャーシュー返せ！」

前言撤回だ。こちらがラーメンから目を離している一瞬を見逃さず、チャーシューがかつさらわれた。返すように叫んだ時には手遅れで、既に口の中へと運び込まれてしまった後だった。

「大事にとつといたやつを……」

「おいしいにゃー！」

あまりにも突然の出来事だったため、怒る暇もなく、ただただシヨックに打ちひしがれていた。恨みを込めた眼差しで向かいの席を睨み付けるが、凜はそんなものどく吹く風といった様子で、再び自分のラーメンをすすり始める。改めて湧いてきたチャーシューの怒りをぶつけようと思ったが、幸せそうに食べているのを見ると何となく怒ろうとした感情が小さくなっていくように感じた。まあ、今回くらいは大目に見てやるか。

♪ ♪ ♪

食べ終わってお店を出て、たつくんの後をついていく。今日たつくんがここにいるのはエフェクター？？つてももののパーツを探しに来たからなんだって。

「ねえねえ」

「何だよ」

「エフェクターってなに？」

そう凜が聞くと、たつくんはいきなり転びそうになる。つまずくような石なんてどこにもないけど、どうしたんだろ？何か変なこと聞いちやったかな？

「つたく、前にも一回教えただろーが」

「あれ？ そうだったかにやー」

てへつ、と舌を出してごまかす。たつくんはため息をついてガシガシと頭を掻きながら説明してくれた。エレキギターはアンプっていうスピーカーにつないで音を出らしいんだけど、そのギターとアンプの間につながるのがエフェクターで、これを使うとギターの音色がいろいろ変わるんだって。たつくんがそのエフェクターの写真をいくつか見せてくれたけど、小物入れよりちよつと大きめの箱みたいな感じだった。それにスイッチが何個かくっついていて、踏むとオンオフできるってことなんだって。そう言えば、たつくんがギターを弾いているのを聞いた時、いきなり音が変わったたりしたのもこれを使ったからなんだね。

「——で、一口にエフェクターって言ってもいろんな種類があるんだけど、それは長くなるからパスだな。何となくわかったか？」

「うん！ たつくんがギターを弾いてて、いきなり音が変わるのもこれを使ってるからなんでしょ？」



「そういうこと。普通に楽器屋行けば売っているんだが、自作したほうが安いし、何より愛着がわく」

「ふーん。じゃあ、作ったことあるの?」

「ああ。いくつか作ってきたが、今でも現役で使っているのは3つかな」

今度はスマホの画面を見せてくれた。何個かエフェクターが並べられていて、これとこれだよって教えてくれた。夕焼けみたいなオレンジ色の箱と白黒のチエック模様の箱がたつくんが作ったものらしい。

「あれ、もう1個は?」

「……」

「たつくん?」

「あ、ああ。もう1個はとっておきで、普段は使っていないからここには写っていない。ここぞという時にしか使わないんだ」

「へ〜」

そう言ったたつくんの顔は一瞬、瞬きしてたら見逃しちゃうくらいの間だけとつても苦しそうな顔をしていた。でも、今はもう普段の強気な顔をしていた。気のせいかな? 「さて、と。ここにちよつと探してみるか」

見るお店を決めたみたいで、たつくんと一緒に入っていく。お店の中は小っちゃい部

品がいろんなところに置いてあって、全部同じものに見える。

「あ、ネコ娘。うかつに触んなよ。結構デリケートなやつもあるから」

それだけを言って、棚に並んでいる部品をじーっと見つめ始めた。時々別の棚のところに移動したり、部品を手にとって見比べたりしていた。そんなに見てたら穴が開いちやんじゃない？ って思っっちゃうくらい。初めて見る顔だった。ギターを弾いている時や、凛たちの練習を見ている時とも違う眼差し。きつと、ほかのみんなは知らない、凛が一番最初に見つけた顔。そう思うと、なんだかちよつとだけ、嬉しくなった。

「よし、じゃあ行くぞ」

「あれ？ もういいの？」

「ああ、さっき行った店の方が安いってことが分かった。だから、そっち行くぞ」

お店の外に出ていくたつくんにおいていかれないように慌ててついでに行く。いつにも増して機嫌がよさそうなたつくんは何かの曲を口ずさんでる。

「ねえねえ、それ何の曲。もしかして新曲？」

「んにや、最近聞いているバンドの曲。結構ポップな曲調だから、参考になるかと思ってな」

聞いてみ、いつもたつくんが使っている音楽プレイヤーを差し出してくれた。イヤホンをつけて再生ボタンを押してみる。ギターの軽快な音から始まって、歌も入っ

てくる。とつても楽しそうな音楽。思わず踊りだしちやいそう。

「いいバンドだろ？」

「うん！ 踊りたくなってきたやうにや！」

曲に合わせてその場でステップを踏みながら歩き出す。時々人にぶつかりそうになつちやうけど、上手く避けていく。

「おいおい、危ねえって。……まあ、いいか」

たつくんが一瞬止めに入ってきそうだったけど、凜に合わせてリズムを取ってくれた。ちよつとびつくりしたけど、とつても嬉しかった。同じリズムで進んでいく。よく考えてみたら、これまでなかったことかも。そう考えると、鼓動がちよつとだけ速くなつた気がする。何でかな？

♪ ♪ ♪

「よし、これで十分だろう」

最初に訪れた店で部品を買い込んで、再び通りに出る。少し買いきりすぎた気がしないでもないが、久しぶりに作るからミスすることを考えれば妥当な量だろう。後は、金属理化学研究部の部室でも貸してもらおう。

「すつごい重そう。そんなにいっぱい作るの？」

「これで上手くいけば2個くらいかな。久しぶりだから、多分1個できりや上出来だな」

「えー!? そんなにあるのに…」

「素人が作るからな。3個に1個は音が出ない」

「へー、難しいんだね」

そんな取り留めのないことを話しながら駅へと歩いていると、なにやら人が集まっている場所があった。

「あれなんだろう?」

「さあな、行ってみるか」

近づいてみると、どうやらシルバー・アクセサリを路上で販売しているようだ。ちょうど探していたところなので立ち止まって見ていくことにした。

「いらっしやい。……これは、珍しいお客さんだ。今話題のスクールアイドルにめきめきと名を上げているギタリストさんのカップルとは」

「凛を知っているのかにや?」

「もちろん。確かμ'sだったかな? 9人という大人数ながら、1人1人のクオリティも高いグループ。最近注目していたんだよ」

顔を赤くして、照れる凛。俺たちよりも幾つか年上であろう、柔らかな微笑みを浮かべる青年は、俺の方に視線を向けてきた。底知れぬ何かを感じる瞳。まるで見透かされているような、文字通り背景までもが見られているような気さえした。

「君のこともずつと注目しているんだ。バンドだけでなくライブハウス全体を支配してしまうような私の強いギターを弾いたかと思えば、すべての楽器を調和させるアプローチもしてくる、とても面白いギタリスト」

「そんな大したもんじゃないさ」

「この前のライブは凄かったね。1曲どころか1フレーズで一気に客を引き込んだ」

少し前の再結成1発目のライブのことだろう。自分でもいい感触はあったが、それを聴いていた人から言われると、少し嬉しくなった。

「それこそ、俺の力じゃないさ。あいつらのお蔭だよ」

「確か、こちらに来る以前に組んでいたバンドなのだろう？ ブランクがあっただろうに、それを感じさせないライブだったよ」

「それはどうも」

直球な褒め言葉に照れくさくなって、思わず素っ気無い返事を返してしまった。視線を外し、並べられているアクセサリーに移す。十字架やスリーピースなんかのオーソドックスなデザインのものから様々なモチーフを組み合わせていたり、初めて見る形だったりといった独創的なものまでバリエーション豊かだ。

「これ、全部あんたが作ったのか？」

「一応ね。幾つかは手伝ってもらったものもあるけれど」

「凄いにゃー、ことりちゃんにも負けてないかも」

確かにそう思う。衣装とシルバー・アクセサリーというベクトルの違いこそあれど、センスや想像性なんて点ではことりさんに匹敵、もしかしたらそれ以上のものを感じた。

「ほんと、普通にアクセサリー・シヨップなんかで売っていてもおかしくないレベルだ」

「いやいや、僕なんてまだまだだよ。どうか、お気に召すものはあったかい?」

「どれも素敵すぎて選べないくらいだよ」

凜の言うとおりどれも良いデザインで選びきれない。とは言え、片っ端から買うほどのお金は残っていなかった。買えるのは2・3点がギリギリだろう。幾つか候補を絞っていると、1つ気になるデザインのものを見つけた。鈴と三日月をかたどったデザインのもの。三日月の腹のところは小さな星が埋め込まれているような形だ。なんとなくだけど、凜がつけたらとても似合いそうな気がした。

「それが気になるのかい? テーマはネコと星空。自信作の1つだね」

テーマを聞いて、すどん、と不思議の塊が落ちた。確かにこれは凜のイメージだ。見たままのネコっぽさと、時折見せる手に届かない星を見つめるような瞳。それを感じたんだ。

「まあ、俺には合わないだろうけどな。これとこれ、後はそいつを頼む」

「うん、ありがとう。えっと、3200円だね」

ちよウどの金額を手渡す。アクセサリは小さな紙袋に入れて渡してくれた。

「それとこれはいつもいい音楽を聞かせてくれるお礼だよ」

そう言つて、先程のネコと星空のアクセサリを別の袋に入れて差し出してきた。無料でもらう訳にはいかないともう一度財布を取り出そうとすると、青年は空いている片手でそれを制した。

「言つただらう？ いい音楽を聞かせてくれるお礼だつて。それに、隣の彼女にでもプレゼントしてあげるといい」

「そんなんじゃないよ。ただ……」

「ただ、なんだい？」

凜は俺にとつてどんな存在なのだらう？ 曲を提供する相手。いや、それだけじゃない。本来会うはずのなかった、偶然知り合つただけの間柄。そう考えると、心の何処かがチクリと痛む気がした。そうか、じゃあ凜は、

「ただの、大切な友人だ」

彼は一瞬目を丸くして、そして直ぐに何か察したように元通り柔和な笑みを浮かべた。

「じゃあ尚更、彼女に贈つてあげるといい。足りないなら、これからもいい音楽を聞かせてくれることを期待している証だとも思つてよ」

「分かった、有難くいただいていく。…おい、ネコ娘。もうそろそろ行くぞ。んで、どうすんだ?」

「ええー!? もう行くの? すつごく欲しいけど…今月はお小遣いピンチで」

「それなら、また彼と来ればいいよ。よくこの辺にいるから」

凧はまだ少し納得できていないようで、渋々といった表情で頷いた。それを見届けると、彼はアクセサリを仕舞い始めた。

「さて、もうそろそろ一雨来そうだから今日は店じまいだ。君たちもお気をつけて」

そう俺たちに告げて、名も知らぬ青年は雑踏の中へと消えていった。まるで、けむりが空気中へと拡散して、最初から何処にも存在しなかったかのように。



Ex Phrase: When You Wish U  
pon The Star

がたんごとな。電車は進んでいく。

がたんごとな。2人に乗せて。

がたんごとな。電車は揺れる。

がたんごとな。2人の気持ちも一緒に。

がたんごとな。そして、ドアが閉まった。

2人は何処へ行くのか。それを知る者は誰もいない。

♪ ♪ ♪

路上販売をしていた銀細工師の青年が消えた後、2人はどちらからともなく歩み出した。先程と比べるまでもなく、会話はなかった。それは両者ともがこの時間の終わりを感じているからだ。そして、駅に着いた。瞬きのような一瞬。心臓が鼓動を始めてからそれを終えるまでのような長い間。そんな矛盾した感覚を味わった無言の時間を破つたのは、少年の言葉だった。

「じゃあ、また練習で——」

「待って」

しかし、最後まで言い切ることは叶わなかった。傍らの少女が遮る。

「このまま、どこかへ行くうよ」

「どこかって何処だよ」

「どこでもいいよ。凜もたつくんも知らない場所」

「なんだよそりゃ」

「お願い」

少年は呆れた表情で見る。いつもの気紛れじゃなくて、真剣な瞳。今にも涙が零れ落ちてしまふような瞳だと。少年は何故かそう感じた。

「わーっつたよ。……とりあえず、電車に乗ってみるか。」

「本当に？ 本当にいいの？」

「いいって言ってるだろ。そんな」

泣きそうな顔で言われたら断れるか。そう言おうとしたが気恥ずかしさが急にやってきて、途中で口をつぐんだ。誤魔化すように、早く行くぞとだけ言って改札へと向かった。それを聞いて、少女は途端に笑顔を浮かべ少年の後を追っていく。

「ねえねえ、たつくんがギターを始めたきっかけって何？」

不規則に揺れる電車の中で、唐突に少女は訊ねた。

「きっかけ？　そうだな、親戚の家に行つた時偶然ギターを見つけて、それを借りて弾いていくうちに気が付いたら好きになつてた。最初は音楽にはあんまり興味がなかつたし」

「そうなの？」

「ああ、いろんな音楽を聴きだしたのも弾き始めてからだな。それからはずっと、どんな時も音楽がそばにあつた」

音楽がそばに、と少年の言葉を繰り返す。その意味をあまり理解できていないようだ。それを察して、少年はゆつくりと口を開いた。

「心躍るような気分の時にも、行き場のない感情にむしばまれている時も、全然上達しないで、ギターを弾きたくなくなった時でさえ、音楽は、素敵な曲は鳴つてた」

「たつくんは本当に音楽が好きなんだね。凜ももちろん好きだけど、たつくんには負けちゃつてるよ」

「感情にまで優劣をつける必要はねーと思うけどな。俺もネコ娘も音楽が好き。なら一緒だろ」

「一緒かな？」

「一緒だ」

「そっか………ていうか、いい加減ネコ娘つていうのやめるにやー！」

「そつちだつてたつくんて呼ぶのやめろよな」

「たつくんはたつくんだにや」

これまで幾度となく繰り返し、そして今日会つた時にもあつたやりとり。まつたく、なんて眩きながらも少年は笑みを浮かべる。これ以上付かず離れずの関係。それに彼は心地よさを感じていた。少女もまた今の彼との距離感に安心を覚えていた。憎まれ口を叩いても必ず返してくれる。幼馴染やメンバーとはまた違つたこの関係に。

「もうそろそろ降りてみるか」

少年の提案に満面の笑みで少女は頷く。ドアが開いた途端、彼女は駆け出した。その後を彼はゆつくりとついでに行く。アナウンスの後にドアは閉まり、2人の姿が消えた電車は一層暗さを増した灰色の雲の中へとゆつくり走り出した。

♪ ♪ ♪

2人は人もまばらな道を歩いていく。交差点や分かれ道にぶつかると、時には少年が、時には少女が方向を決めて進んでいく。先に何かがあるのか。そんなことを楽しみながら当てもなく前へ進む。

「なあ」

「なあ?」

「ネコ娘は何しにアキバに来てたんだ?」

「えっ、凜は何もやることなくって、それで誰かに会いたくなって……」

急に気恥ずかしさが尻すぼみに小さくなっていく声。少年に届く前に地面へと落ちていってしまう。もちろん彼はなんだって？と聞き返した。

「なんでもない！」

赤くなつてしまった顔を誤魔化すように叫んで駆け出した。慌てて追いかける少年だが、抜群の運動神経を誇る少女が全力に近いスピードで走るのには追いつけない。

「おい、待てって。一人で勝手に行くな！」

追いつくことが不可能だと悟った少年は立ち止まって、尚も前方を走る彼女に呼びかけた。普段の煙草のせいとか、少し走っただけでも彼の息は少し上がっていた。呼び止められたことに気付いた彼女は少し離れた位置で立ち止まって、振り向いた。

「まったく、いきなりなんだよ」

「ごめん」

悪いと思つてないだろ、なんて悪態をつきたくなりながらも、歩いて近づいていく。それを見ていた少女は、何事か思いついたようで、180度方向転換して再び走り出した。

「ほらほら、こつちこつち——！」

「おい、だから止まれって！」

つられて少年も走り出すが、少女は距離が縮まったと思うとスピードを上げるからなかなか追いつくことができない。次第に息も切れてきて、少しばかり禁煙したほうがいかなんて彼にしてはありえないことを思いついてしまうほどだった。

「たつくん、男の子なのにだらしないにやー」

ようやく立ち止まった少女がそう声をかける。だいぶ息を切らしながらも少年は彼女の隣までやってきた。

「うるせ。こちとら歌って踊るんじやなくて、楽器を弾くのが仕事だ。それに、荷物もあるから重いんだよ」

「言い訳、カッコ悪いにや」

「どうとでも言え」

休むのに近くに会った自販機に寄り掛かる。一方の少女は少し息が上がっているものの、十分に余力があるようにみられる。

「でも、悪くないね」

「何がだよ」

息を整えながら言い返す。数歩歩いてから、向き直って少女は答えた。

「誰かと一緒に走るのが。一人でビューンって走るのも好きだけど、こうして一緒に走ってくれる人がいると、もっと楽しくなったよ」

「そうかい」

俺は走るのそんなに好きじゃない、そんな風に非難してやろうと思っていたが、隣に立った少女の笑みを見るとどことなく憚られてしまった。行き場のなくなつた言葉の残滓の代わりに大きく息をついて、自販機から背を離れた。

「もう少し先まで行ってみようよ」

「もう絶対走れないからな」

「分かつてるって、ゆっくり歩こう」

そうして歩き出そうとした瞬間、少年の頬に何か冷たいものが当たる。

「ん？」

「どうしたの？」

「いや、雨が降ってきた、よう、な」

次第に冷たい感触が増えてくる。隣の少女もそれに気づいたようで、そろって空を向く。真つ黒い雲からは確かに水滴が降り落ちてきていた。

「雨だ！ どうしよう、たつくん」

「だいが駅から歩いてきたからな、先に進んで雨宿りできるところを探そう」

話している間にも雨粒は落ちてくる数と勢いを盛んにしてくる。慌てて走り出す2人。今度は置いて行ってしまうように少年にペースを合わせる。次第に強く降り

出した雨の中を彼らは転ばないように気を付けながら駆けていく。

雨は降り続ける。植物や道路、そして彼らが無慈悲に濡らしていく。しかし、冷たいはずの雨を不思議と2人は心地よく感じていた。走ったことで体が火照っていたのか、それとも濡れているのが1人ではないからなのか。そんな考えすらも洗い流してしまふかのように、ただ雨は降り続けた。

♪ ♪ ♪

その後数分走り続けすつかり雨に濡れてしまったところ、2人はようやく雨宿りが出来るところを見つけた。まばらに見える民家の中にぼつりと立っている喫茶店。店の中に入ろうとしたが、鍵がかかっていた。休日なのに閉まっているなんて不思議に思った少年が改めて入口の扉を見ると、ノブのところどころに何か木の板がかけられていた。どうやらこの喫茶店は休日の夜にはバーとして使われるらしく、その分午後は少し早く一旦閉店して、夜にまたオープンするようだ。今はちょうど準備中の時間だった。雨をしのげるだけまし、と自分を納得させる。

「こんなことなら、傘を持ってくるんだった」

「ほんとだよ、へつくしゆん」

「流石にこの時期の雨は冷たい。このままじゃ風邪ひいちゃう」

しかし、雨はまだまだ止みそうになかった。もうしばらくの間ここで雨宿りするしか



なさそうだった。

「あ！ たつくん、さっき買った部品は大丈夫？」

「大丈夫、乾かしや使えるさ。それに、カバンの中まで雨は入ってないっぽいし」

念のためカバンを開けて中身の確認するが、濡れてはいないようだった。パーツはそれぞれ個装されて小袋に入っていたから、よほどのことがない限り濡れることなどない。少年が他の物はどうかを確認していると、ポケットティッシュを見つけた。そしてそれを躊躇わずに少女に差し出す。

「ほら、これで拭いとけ。ちつとはマシだろ」

「え、凜は大丈夫だからたつくんが使ってた」

「いやいや、お前今度ライブあるって言ってたろ。風邪ひいたら不味いんだから」

「たつくんの方が濡れてるんだから、使った方が良いよ」

「そっちの方が濡れてんだろが」

「たつくんの方が」

「いや、ネコ娘の方が」

むっつ、と互いが唸りながら顔を突き合わせていると、突然扉がガチャリと開いた。顔を出したのは、初老の男性。ずぶ濡れの2人を見つけて慌てて声を掛けた。

「おやおや、2人ともそんなに濡れて。風邪をひいてしまうから早く中に入りなさい」

2人はいきなり出てきた人物に驚きながらも、その言葉に従って店の中へと入っている。店内は2人掛けの机と4人掛けの机が2つずつとカウンター席が6つ。カウンターの向こうには年季の入ったいそうな器具と時折落ちる稲光を見事に反射する新品のものが混在していた。後ろ手で扉を閉めて、傍らの少女の方を見るとこれ以上濡れる心配がなくなつたことへの安堵からか短く息を漏らしていた。

「ほら、これで体を拭きなさい」

この店のマスターらしき人物がカウンター奥の扉からバスタオルを2枚持つて出てくる。2人はお礼を言つて受け取り、銘々に濡れたところを拭いていく。

「雨に打たれて寒かつたらう。何か温かいものでも淹れよう。何がいいかな?」

「俺はコーヒード」

「豆の希望はあるかい?」

「えーと……じゃあ、ブレンドで」

「そちらのお嬢さんは?」

「凜はココア、をお願いします」

少女は普段友人たちと接するときのような口調で言つてしまい、慌てて敬語を付け足す。

「じゃあ、好きな所に座つて少し待っていてくれ」

2人にそう告げてゆつたりとした足取りでカウンターへと入っていった。そして2人は窓際の2人掛けの席に座る。

「雨、なかなか止まないね」

「通り雨っぽいし、少し待ってりや何とかかなるだろ。これから何か予定があるわけでもないし」

粗方拭き終わった少年は、タオルを座っている椅子の背もたれにかけて、窓の方へと目を向ける。真つ黒な雲からは間断なく雨粒が降り注ぎ、遠くのほうでは光が瞬き、数瞬遅れて轟音が伝わってくる。

「にゃっー」

向かいの席に座っている少女が、その音に驚いて思わず声を出す。少年は何故だか少しおかしくなって、少しばかり口元を緩めた。

「ははっ、本当にネコみたいだな」

「今のはちよつとビックリしただけだもん」

そんなことを言われた少女は、恥ずかしくなって髪を拭いていたタオルで顔を隠す。それ以降は光と音の間隔が大きくなり、聞こえてくるのも大分小さいものばかりとなった。

「ごめんね、たつくん」

少女が不意にそう呟いた。

「ん、何がだよ?」

「凜がさつき無理言つてどこか行こうなんて言つたせいでこんなに濡れることになつちやつたから」

「ネコ娘が悪いわけじゃねーだろ。天気なんだから、どうしようもない」

「そんなことない。さつきだつてアクセサリーの人に早く帰つた方が良くって言われてたし、もう帰ろうとしてたのに無理やり引き留めたし、それにそれに……」

顔を見せずに謝罪を繰り返す少女にため息を漏らす少年。おもむろに手をシヨウジヨの方へと伸ばし、そのまま頭に乗せる。そして頭に乗せたまま手を左右に動かすが、それは撫でるといふより揺らす、といった表現の方があつている強さだ。

「え、えつ? 何?」

困惑する少女を尻目にそのまま手を動かし続ける。抵抗しようとしていた少女も早々に諦めて、おとなしくなすがままとなった。しばらくそれが続いた後、ふとその手が止まった。

「だーから、気にすんなつて言つてるだろ。そもそも、いやだつたら最初から来てねーよ。それに濡れたのだから半分くらいは俺のせいだしな」

「たつくんの?」

「考えてもみるよ？ ネコ娘一人なら全力で走れば濡れる前に駅に着けただろうに俺に合わせて走ったせいで濡れる羽目になったんだろ？」

だからさ、と一拍おいて今度は優しく頭を撫でながら続ける。

「お前はいつもらしく能天気ニャーニャー言ってるやいんだよ。そんな調子じゃこつちが狂う」

「う、うん。分かった」

それならよし、とだけ言って少年は少女の頭から手を放す。彼女は名残惜しそうにあつと言いかけたが、声になることはなかった。そこへ、2つのカップを乗せたトレイを持って喫茶店の主人がやって来た。

「お待たせしたね、珈琲とココアだ。熱いからゆっくり飲んでくれ」

「ありがとうございます」

出来る限り波面が立たないように静かに机の上に置かれる。少女はタオルから顔を出してそつと両手でカップを握り、少年は片手で取っ手を持ち、慎重にカップの中の黒い液体に口を付ける。

「美味しい」

どちらが先に発した言葉だったろうか。雨に打たれたことよって冷えた体に暖かいものを取り入れたことはもちろん、主人の力量がいかなく発揮されたものでもあつ

た。

「あつたまるにや〜」

「芯まで冷えた体にこれは堪らないな。これで後はタバコが吸えりや最高なん、だ、が  
…」

何気なく呟いてしまったことに対して、直ぐに少年は失言だったと気付いた。ここにいるのは自分だけではなかったからだ。

「あー！ まだタバコやめてなかったの？ 希ちゃん言つてたよ、いくら言つても止めないって」

「分かった分かった、悪かった。出来るだけ気を付けるよ」

諸手を挙げて降参の意を表すが、追求の声は収まりそうにないことは見て取れた。どうにか話を逸らせないかと店内を見回すと、よく見知ったものを見つけた。

「な、なあマスター」

「なんでしよう？」

「あのアコギ、ちよつと弾かせてもらつてもいいか？」

「ちよつとー、話逸らさないで——」

言うやいなや少年は席を立ち、アコースティック・ギターのもとに向かう。近づいてみると、大分年代が古いものであることが分かった。少なくとも60年代や70年

代のものである。もしかして、弾かずに飾ってあるだけのものかと少し不安がよぎった。

「君はギターを弾くのかい？」

「ええ、バンドとかも組んでて…」

「それなら弾いてやってくれ、最近は弾く人がいなくて持て余し気味だったんだ」

「言つといてなんですけど、これって大分古いものですよね？俺なんか弾いても…」

「私が若いときに買った安物だよ。気構えずに弾いてくれ。それに、楽器は飾っていい意味がない。弾いてこそだよ」

「ありがとうございます」

そう言われても、古いものであるのは確かなので慎重に持つて席に戻る。カバンから底の浅い円柱型のピックケースを取り出し、ふたを開ける。普段は細長い三角形のティアドロップ型と呼ばれるものを使うが、今回はおにぎりのように幅が広い三角形のトライアングル型のピックを選んだ。アコースティック・ギターではいつもこちらを使っていた。先端はすり減っており、表面の文字もかすれていて、かろうじてTHINの文字が読み取れるくらいだ。一度解放弦を鳴らしてみると、年代を感じる深く柔らかな響きが鳴った。多少音が外れていたの、携帯のチューナーアプリを起動し音を合わせていく。概ね揃ったところでできとうにコードを鳴らしていく。少年が持っているものと

比べ音にシャープさはないものの、それを補つて余りあるほどの甘い音色。何を弾こうかと脳内のミュージック・リストを参照していく。オリジナルよりかは既存曲の方が良いだろう。そして、最近弾き語りで練習していた曲を思い出した。

終始ハネたりリズムのこの曲はギターだけ、歌だけならそれほど難しい曲ではないのだが、2つを同時にやるとなるとどちらかに引つ張られてしまいやすい曲だ。最近は大分安定した来てから大丈夫だろう、とゆつたりとリズムを取る。

1、2、3、4

観客2人を見てみると、少女の方は聴いたことがある曲だなんて顔で、主人は何処か懐かしむように目を閉じている。

「When the night, has come——」

外の雨は相変わらず激しいが、この室内はゆつたりと時間が流れていく。優しく響き渡るギターの音色と少し囁れた声が丁寧に奏でられている。そして、最後の音が鳴らされる。音が完全に消えた後にパチパチとささやかながら確かな賞賛のこもった拍手が鳴る。

「ありがとうございました」

少し冷めてきたコーヒーを飲む。少し危ない部分もあつたがどうにか聞くに堪える演奏が出来たであろう、と少年は自己分析する。ふと正面を向くと、向かい側の少女は



未だ期待するような瞳を向けており、カウンターの向こうからも同様のものを感じた。「では、僭越ながらも1曲。次はオリジナルの曲を」

先程とは打って変わって強めに鳴らされる。コード進行だけは外さないようにしながらも即興で弾いていく。オリジナルのもので初期の方に作ったものだからどうすれば外さないかは、ギターを弾く指先が覚えている。最初のサビが終わってからは一転静かになる。雨音をも曲の一部かのような気さえしてくる。そして再び曲調は激しく。ここにはいない誰かに届けと、雨雲よ吹き飛べと訴えかけるように掻き鳴らしていく。その勢いを止めぬままラストへ。1曲目とは違い、短く音を切って終わった。再び少年へと拍手が送られるが、今回は少し遠くからの1人分しか聞こえない。不思議に思っ前を見ると、少女は安らかに寝息をたてていた。

「まったたく。まあ、しょうがねえか」

冷たい雨に打たれながら走って、体力を消耗したところに暖かなものを飲んだから喉が重くなっても無理はない。少年はギターをもとのスタンドに戻しつつ、主人からブランケットを借りて彼女を起こさないように被せる。そしてカップを持って、カウンターに腰かけた。

「とてもいい演奏だったよ、君くらいの年では私はそこまで弾けなかったろう」

「ありがとうございます」

すると、主人は下から小さな箱を取り出す。タバコである。

「君も吸うんだろう？ 遠慮しなくていい」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

一度立ち上がって、カバンからタバコとライターを取り出す。慣れた手つきで、火を灯す。

「私も15・6に吸い始めたのだが、君と違ってただ悪ぶりたかっただけだったよ」

「俺もそう変わりませんよ。ギターを教わった人の真似をしているだけです」

「いや、吸い方を見ればわかる。ただ大人の猿真似かどうかはね」

少年は息を吐いて、タバコを持つ左手を見る。少しくらいあの人に近づけただろうか。様になってきているだろうか。幾ら見てもそれは分からなかった。

「バンドを組んでいるんだっただよね？」

「ええ、最近色々なバンドのサポートとして弾くことが多かったですけど」

「そうか、一見シンプルな音のようだが、その奥にはいろいろなものが見えた」

「貴方もバンドを？」

「少しばかりね。結局夢半ばに挫折して、今ではこんな僻地の喫茶店をやっているがね」

目を細めて、懐かしむようにギターを見る。きつと、あのギターは一番最初に手にしたものなのだろう、と少年は感じた。自分なんかよりもずっとずっと色々な経験を音を

響かせてきたものだろう、と。

「君はプロを指しているのかい？」

「いや、ただいい音楽を弾ければそれでいいです。やりたいようにやれば十分なので」「それはもつたいない、君なら上を指せるだろうに」

「上を指したところで、それは自分のやりたいものと変わったら意味がない。俺はそう思っています」

じつと、主人が彼の瞳を覗き込む。彼も目を逸らすことはなかった。

「なるほど、君は君なりの音楽を見つけたわけだね」

「まだまだです。今もずっと迷っていて、でも歩き続けている」

「いつか見つかるといいね」

「ありがとうございます」

いつの間にかタバコの火は消えていた。主人が出してくれた灰皿にそれを捨てるともぞもぞと動く音がした。どうやら、少女が目を覚ましつつあるようだ。

「まったく、ようやく起きたか」

少年はそちらへと向かい、呼びかけながら彼女の体を揺らす。まだ寝ぼけ眼ながらも意識は覚醒しているようだ。

「雨もあがったようだよ」

言われて、2人で外を見ると確かに雲が切れていて、合間からは星の光が瞬いている。  
 「もうそろそろ帰るか、遅くなったら不味いな」

準備しろ、とだけ少女に告げて彼は再びカウンターへと向かった。飲み物の代金を尋ねるが、訊かれた主人は首を振った。

「お代はいいよ。素敵な曲を聞かせてもらったからね」

「いや、でも俺が勝手にやったことですし……」

「それなら、またここに来て演奏してくれればいい」

これ以上は水掛け論になってしまいうだろうと思ひ、彼はその好意を受け取ることにした。

「またのご来店をお待ちしています」

その言葉を背に受け、2人はゆっくりとドアを閉めた。

♪ ♪ ♪

「すっかり暗くなっちゃったな」

「でもでも、星がとつてもキレイだよ!」

言われて、見上げてみると満天の星空が広がっている。周囲には明かりが少ないためか、目を凝らすと普段は見えない星も見えてくる。

「これだけ星がありや、願い事も叶いそうだな」

「届くかな？」

「届くさ、ちゃんと願えばな」

2人は口を閉ざした。時折吹く風が草木を揺らす音だけだ。

「さつきさ、エフエクタの話しただろ？」

「うん」

「実はさ、3つ目でのは師匠に教えてもらいながら作ったやつなんだ」

ぼつりぼつりと語るその声は星空へと吸い込まれていくようだ。

「それで、そいつを使ったライブは必ず上手くいった。ゲン担ぎ、って言うよりもなんていうか、これまでの過去そのものなんだ」

でも、とトーンを落とす。

「最近思ってたんだ。過去に継ってるだけじゃないのかって。ただただ上手くいったって過去を引き延ばしているだけじゃないかって。だから、3つ目はって聞かれたときに答えに詰まったんだ」

「そうなんだ……」

「正直、これからも使っていくと思う。過去は早々切り離せない」

過去は切り離せない。その言葉を少女は心の中で反芻する。自分もそうである自覚があるから、未だに恐怖でいっぱいだから。

「それでも、それでも何時かは進める時が来ると思う。自分一人じゃ無理でも俺には仲間がいるから、アイツらもμ'sの皆も。そして、凜もな」

「え？」

唐突に名前と呼ばれて驚きとともに、恥ずかしくなってしまった。それは少年の方も同じで、目を逸らすかのように上を向く。

「だから、お前も無理せずに頼りやいい。分かったか？」

「うん……でも、ちよつとクサすぎないかにや？」

「うるせ、自覚してるよ」

2人で笑いあう。しかし、直ぐに少年はまじめな顔に戻って言った。

「まあ、とりあえずは星に願いを、つてな。こんだけあるんだ、きつとどれか1つくらいは聞いてくれるさ」

「ほんとに？」

「ああ、きつとな……」

そう告げる少年の横顔は何処か儂く、消えてしまいうでもあった。少女はそんな少年の手を、ちゃんと存在すんだってことを確かめるようにぎゅつと握った。

「どうした？」

「ううん、ただ……」

「どう言えばいいのだろう、少女は少し迷ってから星々に負けないくらいに笑みを浮かべてそつと言った。

「ありがとう」

## 2nd Phrase: Wake For Young Souls

「松波さん、3番の診察室にどうぞ」

自分の名前が呼ばれたので、重い体を持ちあげてそちらに向かう。本当なら入学式で校長やらPTAやらの長つたらしい話を聴いている時間だが、これから聴くのは医者の話だ。引越しやら環境の変化やらで風邪を引いてしまったらしい。入学式に行こうとしたところを希さんに止められ、西木野病院というところに来た。流星に、心配だから着いて行くと言うのは止めたが。

「ただの風邪ですけれど、少し熱が高いですね。気休め程度ですが、点滴をしていきますか?」

「じゃあ、お願いします」

そう告げると、紙に何かを書き加えて近くのナースを呼んだ。

「こちらにどうぞ」

頷いて、後について行く。風邪でする点滴なんて、せいぜいスポーツドリンクを薄めたようなものだったはずだから、効果は期待できない。よっぽど具合が悪そうな顔をし



ているのだろう。そもそも、あまり風邪は引かない方なのに、と思う。もしかしたら、煙草の量が多くなっていたかもしれない。減らした方がいいだろうか。そんなことを考えていると、別の部屋に着いた。言われた通りに左腕を出すと、手早く血管を探し出され、固定し注射針が刺される。チクツとした痛みが走った。それからすぐさま点滴用の器具が組み立てられていく。

「では、1時間ほどですね。横になって安静にしてください」

言われたとおりに、医療用の少し硬いベッドに横になる。手持無沙汰だったので、こちらに来てからのことを少し振り返ることにした。1人ですべてをこなすことには多少の不安があったものの、やってみると存外大変ではなかった。当たり前だが自分しかないのだからだいぶ融通が聞く。それだから、夜遅くまでギターを弾くこともできた。ここ最近はや明けに寝て昼過ぎに起きる、そんな生活をしていたからリズムが崩れてしまったのかもしれない。加えて、思いのほか気温が低かったのも関係あるだろう。もう少し着込んでいくべきだったか。

そもそも、なんでここにいるんだっけ？バンドを組んでいたはずなのにそこを抜けてまで。あまり親とは良好な関係ではなかった。でも、それが原因ではなかったはずだ。こうして、俺の我儘を許してくれているんだから。

ああ、そうだ。そうだった。バンドを抜けたからだ。自分でメンバーを集めて、そし

て結成したというのに。それなのに……

「松波さん、起きてください」

呼びかける声に気付いて、目を開ける。どうやら横になってそのまま寝てしまっていたようだ。壁の時計を見ると、ちょうど一時間くらい経過していた。未だ頭がぼんやりとしているが、どうにか体を起こす。

「じゃあ、点滴外しますね」

その言葉に首を振って答える。テープや器具が外されて、小さな注射の後が見えた。すぐにガーゼが貼られ、痕が隠れる。再びナースの後をついて行き、診察室で幾つか医師からの注意事項を聞いてから受付で処方箋を受け取る。そして、近くの薬局で薬を受け取って帰路に着いた。点滴の効果かそれとも少し寝たことによつてか、幾分か体調が回復したように感じた。恐らく後者だろう。とは言え、未だに熱があることは確かだろうからもう少し安静にしているべきだろう。

「あれ、巧実君？」

ふと後ろから声を掛けられる。振り向いてみると希さんだった。学校帰りらしく、制服姿だ。

「こんにちは、希さん。まだ学校の時間なんじゃ？」

「ウチは明日が入学式なんよ。今日は直前の確認だけやったから、もう終わり」

なるほど、と頷く。するといきなり額に手を当てられる。少し冷たい手はひんやりとして心地良かった。

「まだ熱が結構あるみたい。病院には行ってきたん？」

「はい、ちょうどその帰りです」

「無理はあかんよ。ただでさえ病弱少年、って感じなんやから」

「風邪とかには気を付けてたつもりなんですけどね。喉は大事ですし」

「じゃあ尚更タバコは駄目じゃない？」

「まあ、それはそれ、これはこれってことで」

慌ててそっぽを向いて目を逸らすと、やれやれといった風に息を吐かれた。

「全く、まだ未成年なのに。誰から教わったん？」

「えっと……」

茶を濁そうとするが、どうにもそれは許してくれなさそうだ。

「師匠です。俺のギターの。その人の真似ごとですよ」

仕方なく白状した。それと同時にあの人が言っていたことが頭によぎった。

『火をつけたら最初は口の中で吹かすだけ。2回目から吸い込むんだ』

そう教えてくれた。今もずっとその吸い方だ。

「そうなん？ てことは、中学生の時からってことやん。もう……」

「まあ、ロクな人じゃありませんでしたから。それに師匠も言っていましたし。『タバコを吸うやつにロクなのはいい』って。……でも」

「でも?」

「でも、とても大切な人です。色々な意味で」

たくさんさんのことを教わった。くだらないことから、大事なことまで。ほんの短い間だったけれど、片時たりとも忘れられない日々だ。

「そっか。でも、当分は吸ったらダメだからね」

「分かってますって。少なくとも風邪が治るまでは」

隣の部屋だから、簡単にバレてしまうだろうし。ただでさえ勘が鋭い人なんだから。でもまあ、偶には禁煙しても罰は当たらないだろう。熱で浮かれた頭でそんなことを考えながら、未だ寒さが剥がれない道を歩いた。

♪ ♪ ♪

結局、次の日も熱が下がりがきらなかつたので学校は休み、初登校は入学3日目となつた。そもそもクラスが何処かさえ知らないから、先に職員室へ寄つて挨拶をすることに。

「えーと、確か松波だったな」

「はい」

何人かの先生に伝言リレーが行われ、担任に通された。簡単に挨拶をすまして、初日に渡されたプリントや教科書の類を受け取った。

「連絡事項は異常だ。それで、お前の背負ってるのはギターかなんかか？」

「ええ、そうですけど。軽音部とかあれば入ろうかと思っついていて」

「ああ、いいか松波。ウチには軽音部はないんだ」

えっ、と思わず声に出して驚いた。ここは生徒数も多いからその分活動も多種多様だ。だから、軽音部もあるものとばかり思っていた。

「……分かりました。でも、別に持つてくる分には問題ありませんよね？」

「ああ、大丈夫だ。管理に気をつけろよ」

もう一度挨拶をして、職員室を出る。軽音部がないことには驚いたが、別に校外で幾らでも活動はできる。今日の夜に連絡を取っていたバンドの人との顔合わせだ。

「おっと」

「あ、ごめんなさい」

職員室を出て、教室に向かおうとしたところで誰かにぶつかつた。慌てて周りを見渡すと女子生徒だったようだ。背はかなり小さく、中学生といっても通じてしまうだろう。同級生だろうか。

「大丈夫？」

手を貸して立たせる。腰まで伸ばした金色の髪はサラサラと流れており、ところどころ跳ねている。両手で簡単にスカートの前を払うと、彼女はじつとこちらを見た。正確には、背負っているモノのほうに注目されているようだが。

「きみ……」

「おーい、空木。早く来ーい」

彼女が何か話しかけようとしたところで、職員室から顔を出した先生に阻まれる。びくつとまるで小動物みたいに驚きを表した。

「やっべ、じゃあまた会おう少年ー」

風のように職員室へ入っていつてしまった。一体何だったのだろうか。ここで突っ立っていても仕方がないので教室に向かう。ほどなくして教室の前に辿り着き、3割ほど空いているドアを完全に開ける。室内ではすでに来ている生徒が何人かのグループになっておしゃべりを楽しんでいた。が、俺が来たとたん視線が一斉にこちらに向く。まあ、いきなり見知らぬ人間が入ってきたら驚きもするだろう。それらを素知らぬフリで先ほど言われていた席に着く。

「おっ、見たことない顔だな」

「今日初めて来たからな」

会話をしていたグループの1つから眼鏡をかけた男子生徒が近づいてきた。

「じゃあ、お前が入学早々休んでたってやつか。俺は桐島樹。よろしくな」  
「松波巧実だ。こちらこそ」

差し出された手を握り返す。フランクな人柄のようだ。多少息が詰まりそうであることを予想していたから、話しかけてもらえて助かった。

「それで、巧実はギターやってんのか？ それ、ギターだろ？」

机の横に立てかけてあるモノを指さして聞かれる。肯定の意味を込めて頷く。

「まあ、少しね」

「じゃあ、俺の友人に教えてやってくれよ。そいつさ、中学の時に……」

樹の話によると彼の友人というのが卒業式で好きな人に弾き語りで告白したらしい。しかもビートルズを替え歌で。

「凄えなそいつ。ジョン・レノンに撃たれても文句言えねーぞ」

「それで、そいつ高校で軽音部に入ってリベンジしてやるーって意気込んでんだ。……つと、噂をしたら来たようだ」

言われて教室の入り口に目を向けると、無造作ヘアでネコ目の男子が入ってくる。こちらへ向かってきて、樹と2，3言何事か話した後こちらに向き直った。

「紹介しよう、こいつがその朝倉小雨だ」

「よろしくな」

「松波巧実だ。……それで樹、ギターを教えるのは別に構わないがそもそも此処に軽音部はないって話だぞ」

「そうそう、それなんだけどき！」

小雨が勢いよく身を乗り出してくるものだから、驚いてのけぞってしまふ。なんだかやけに張り切っている。

「昨日バンドのライブがあつたんだよ！」

「なに、本当か？」

「ああ、金属理化学研究部ってところなんだけど、そのライブがすごくてさ……」

なんだそりや、と疑念を露わにするも小雨は何故か自分の世界に入つて滔々と語っている。どことなくキナ臭い話だ。なんでわざわざそんなところが軽音部紛いのことを……

いや、何か事情があるのだろうか。だから、表向きには軽音部であることを隠して活動しているとか——

「それで、今日改めてその部室に行ってみようと思うんだ。巧実も行こうぜ！」

「ん？ ……ああ、悪いんだけど今日の放課後はもう予定入れちまつてるんだ。機会を見つけて行ってみるよ」

「そうか。それにしてもドラムのハルさんが——」



ますます昨日休んでしまったことが悔やまれる。とは言え、後悔先に立たず。今は最大限やれることをやるだけだ。まずは、今日会うバンドから。そして、メンバーを見て自分のバンドを。机の下で持て余している左手を人知れずぎゅつと握りしめた。

♪ ♪ ♪

高校生になつて初めての授業を終えて、ひとまず自室へ帰つてきた。未だ開けられていない段ボール箱が3つほど重ねられているうちの一番上から服を取り出す。制服をずっと来ているのがあまり好きではないから私服へ着替える。着替えながら時間を確認すると、まだ待ち合わせの時間まで余裕がある。これなら、疑惑の金属理化学研究部とやりに寄つてくる余裕があつたかもしれない。まあいいか、と独り言をつぶやいて持ち物の確認をする。アタッシュケース状の箱——エフエクタボードなのだが——をもう一度開ける。オーバードライブにデイレイ、フアズ、ワウ、フランジャー、そしてデイストーション。持つていくものは一通り入っていることを点検し、そつとフタを閉める。シールドとピックケースはギターケースの方に入れたから大丈夫。さて、どうしよう。このままもう少し部屋の中に入れてもいいが、外に出て時間をつぶそうか。神田明神あたりで少し弾いてから行くことにしよう。そう決めて、ギターを背負いエフエクタボード片手に部屋を出る。

神田明神のあの長い階段の下に着くと、2人の女の子が駆け下りてきた。と思いき

や、再び駆け足で上りだす。とは言え、そのスピードは歩くよりもちよつと早いくらいだ。BPM80あるくらいだろうか。息もかなり絶え絶えだ。何かのトレーニングだろうか。再び降りてくるだろうから、邪魔にならないように端を上っていく。上り終えると、巫女さん衣装の希さんが境内の掃除をしているのが目に入ってくる。

「こんにちは、希さん」

「おや、風邪は治ったん？」

「ええ、どうにか今日からは学校に行けました。ちよつとギターを弾いてもいいですか？」

「ええよ。参拝する人の邪魔にならないようにね」

「分かりました。ありがとうございます」

初めてここに来た時と同じ場所にボードとギターケースを下ろす。ギターとピックを取り出して簡単にチューニング。うん、よさそうだ。とりあえず軽く何曲か流して引いてみよう。

今日もギターは相変わらずいい音を鳴らしてくれて、少し下がり気味だった気分も段々上昇傾向へ。歌詞を口ずさみながら掻き鳴らす。左手と右手、そして声が独立した人格のようだ。左手は冷静に、正確に弦を抑え、右手は感情のままに上下に動く。そしてその上を声の流れていく。3曲目の曲が終わるとパチパチパチパチ、と速いテンポの

拍手がかけられた。

「すーいすーいーい！」

その声の主は先程階段を走っていた女の子のうちの片方、肩くらいまで伸ばした髪を右側だけテールにして留めている。走り終えたばかりのようでまだ息が整っておらず、頬には汗が伝っていた。

「ちよつと、穂乃果！ いきなり声を掛けてはびつくりするでしょう」

何と言おうか迷っている、小走りで誰かが走ってきた。黒髪で腰のあたりまでの長髪の女の子と黒髪の子ほどではないが長髪で右側を持ち上げて、前髪の少し上はトサカみたいになっている子。前者は凜とした雰囲気伝わってきて、後者は柔らかで優しいだ。

「歌もギターもとつても上手？ ねえねえ、あなた作曲とかできる？」

「えつと、まあ一応出来るけど」

「じゃあじゃあ——」

「穂乃果！ すいませんいきなり声を掛けてしまつて」

一番最初に来た子を黒髪の子がたしなめる。別に、とだけ告げて様子を見ていとうにか話がまとまつたようで、3人が同時に此方を向く。

「ちよつと話を聞いてもらえませんか？」

「30分以内に終わるなら」 携帯で時計を確認してから返答する。

「じゃあ……」

その3人——最初の人が高坂穂乃果、黒髪の人が園田海未、おっとりしたグレーに茶色が混じった髪の人が南ことりと言う名前らしい——が言うには、音ノ木坂学院の廃校をどうにか出来ないか、と言うことで今人気のスクールアイドルをやることになったらしい。しかし、全くの初心者で歌もダンスも衣装もまだないということらしい。

「それで俺に曲を作ってほしい、ということですか」

「そうなんだよ。どうかかな？」

高坂さんが顔の前で手を合わせながら訊ねてくる。俺は息を少し長めに吐いてからギターをしまいながら答えた。

「結論から言ってしまうえば無理ですね」

「え!? なんぞ?」

「理由は大きく3つ。1つ、確かに俺は作曲できますけどそれはあくまでバンドの曲です。アイドルの曲は作ったことがない。2つ、曲と言ってもギターだけじゃどうしようもない。最低でもピアノかシンセが必要」

ファスナーを閉めて立ち上がり、ギターを背負う。エフエクタブードを持ち上げて再び口を開いた。

「そして3つ、1か月後にライブをやるってことらしいですが、今日から曲を作ってそれを録音して。それから曲を覚えてダンスを考えるでは恐らく間に合わない。中途半端なパフォーマンスになってしまうのはそちらも本意ではないでしょう?」

3人は顔を見合わせる。全員が一様に渋い表情を浮かべていた。

「というわけで、申し訳ないですが他の人を当たってみてください」

一方的に言いきって立ち去ろうとする。しかしそれは叶わなかった。目の前に希さんが立っていたからだ。

「副会長さん」

高坂さんが不思議そうにそう呟く。じつと俺を見ていた希さんは徐に口を開いた。

「巧実君、どうかこの子たちの力になってくれへん? うちじゃどうしても限界があるから。それに、音楽に詳しい君なら手伝えることもあるんじゃない?」

瞳を逸らすことなくそう俺に語る。何を思っただけでそう告げたのか。何故会って間もない俺なのか。その瞳からは分からない。でも、ただ1つ、何かを待ち望んでいるような縋るような思いだけは分かった。

「……貴女には借りがあつた。分かりましたよ」

彼女の瞳に安心の色が浮かんだのを見届けてから振り向く。

「という訳で、ダンスのリズムとか歌の練習とかにならアドバイスはできると思います。」

「一応曲もやってはみますが、期待しないでどうか別の人を見つけてください」

「本当!?!」

「もちろん。でも、俺も自分の活動があるのでその合間にですけど」

「ううん、それでも凄く助かるよ。これからよろしくね巧実くん!」

そう元気に言い放つて右手を差し出す。こちらこそとその手を握り返す。女の子の柔らかい手。しかし、そこには彼女の信念を表すようにしっかりと力がこもっている。

「お手数をおかけしますが、よろしくお願いします」

「よろしくね、巧実くん」

園田さん、南さんとも続けて握手を交わす。何とも不思議なことになったものだ。でも、面白い経験になることは間違いない。どこか夢のようでも他人事のように感じながら俺は歩き出した。